

司馬遼太郎
項羽と劉邦
上卷



項羽と劉邦

上卷

司馬遼太郎

新潮社版

項羽と劉邦（上巻）

発行 昭和五十五年六月五日

六十二刷 平成五年十一月二十五日

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社



発行所

郵便番号 一六二／振替 東京四一八〇八
東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 営業部 (366) 五二二／編集部 (366) 五四一一

株式会社 新潮社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社読者係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ryotaro Shiba, 1980 • Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります

ISBN4-10-309729-9 C0093

目次

始皇帝の帰還	5
江南の反乱	33
沛の町の樹の下で	60
拳　　兵	91
楚人の冠	132
長江を渡る	169
楚の武信君の死	199
宋義を撃つ	233
鉅鹿の戦	266
秦の章邯將軍	300

装画・扉题字／下田義寛

項羽と劉邦

(上卷)

始皇帝の帰還

秦の始皇帝、名は政、かれが六国を征服して中国大陆をその絶対政權のもとに置いたのは、紀元前二二一年である。それまでこの大陸は、諸方に王国が割拠し、つまりは分裂している状態こそ常態であると言われてきた。統一こそ異常であつたといつていい。

「——あんなやつが」

皇帝か——と、その在世中、巡幸中のかれを路傍で見た多くの者がおもつたのは、かれによつてほろぼされた国々の遺民としての感情もあつたであらう。しかし一方、かれが中国を統一するといふばかけた、いわば絵空事のようなことを現実にしてしまったことが、ひとびとにかえつていかかわしさを感じさせる結果になつた。第一、皇帝といふことばそのものが新語であり、かれ自身が創作した。言葉そのものがまだ新しくて熟していないのに、実体である皇帝に対する尊敬心の習慣が根づいてゐるはずがなかつた。

かれ以前、地上に君臨する者として、国々に王というものがいた。貴族もいた。ところが、かれは

それらの王制や貴族制を一挙に廃してしまった。以前は、人民はうまれながらに人民であり、さらには、うまれながらの王や貴族を地の氏神に似たものとして尊敬し、その天賦の地位を人民は窺おうとはしなかった。それでもって、なんとか大地は治まっていた。ただ大饑饉があると人民どもは群れをなし、食をもとめて流浪し、王や貴族をかえりみなかった。それだけのことであった。

始皇帝は、なんとなく統治し統治されているという過去のあいまいな制度のすべてを一掃した。それにかわるに、中央集権というふしぎな機構をもちこみ、大綱のように大陸にひろげ、精密な官僚組織の網の目でもってすべての人民をつつみこもうとした。包みこみの原理は、法であった。法をもつて刑罰や徴収、労役などすべてが運営され、強制されるなどは、いままでこの大陸の人間たちが経験しなかったものだ。もつとも、かつて辺境にあったかれの秦王国の人民だけはそれを経験してきた。要するに征服国である秦のやり方が、この大陸のすみずみに及ぼされた。

「王たちの時代はおわり、すべてが秦になった」

ということの煩瑣さは、未経験の中原の人民どもには耐えがたい。法のうるささだけでなく、官僚的権力者をどう尊敬していいのか、過去に伝統がないだけにみなとまどった。

皇帝だけが、この地上におけるただ一人の権力者だということだけはひとびとに理解できた。皇帝一人が官僚組織をにぎり、それを手足のようにつかい、すべてを皇帝自身が裁決しているということである。権力を世襲するのも皇帝家だけしか認められない。貴族というあいまいな中間階級が消滅した以上、皇帝一人が、じかに人民という海のようなものに対しているようなものであった。言いかえれば、一本だけの釘に皇帝がぶらさがっているだけで、あとはすべて人民だけという風景になっ

まっている。
(つまりは、皇帝を倒せば、倒した者が皇帝になれるということではないか)

という奇抜な、しかしあたりまえの、ともかくも前時代にはなかったということではふしぎな政治認識を多くの人民に植えつけてしまったことは、当のこの制度の創始者自身は気づかなかつたことであるにちがいない。

この皇帝制度の創始者は、ひどく土木事業を好んだ。人民という人民がかれの宮殿の普請か、かれの生前墓の建設工事か、または辺境の匈奴をふせぐための長城の工事か、あるいは首都咸陽から八方に通じている皇帝専用道路の工事かにかりだされていたが、そういう土工のなかに陳勝という者もいた。のちかれが仲間の土工たちをおつて皇帝をたおすべく反乱に立ちあがったとき、おびえる人民どもを叱咤して、「王になるのも侯になるのもみな思いのままの世の中ではないか」（王侯將相寧ンゾ種アラランヤ）という有名な文句を吐いたが、これは嚴密にはかれだけの独創ではない。加害側の始皇帝も加わっている。始皇帝がつくりあげた前例のない政治空間がなければ、陳勝がむちをあげ、大地をたたき、この名文句を吐いても、土工たちはどうめかなかつたであらう。

皇帝一個が、中間勢力なしに宇内のすべての人間——中国の人口は五千万と想像される——に対してというのは、自信家の始皇帝にとつても多少の不安と肌寒さがあった。ただかれは組織でうずめようとせず、裝飾でうずめようとした。自分一個の存在を嚴重に裝飾し、いやがうえにも絶対であることを見せようとした。かれは皇帝という称号もつくつたが、かれのみが用いる一人称も制定した。自分のことを、

「朕」

とよんだ。一人称を専有したのである。

さらには、皇帝が中国のすみずみに行くために専用道路をつくつたのも、ただ一人の存在としての

裝飾のために重要であつた。かれがとほうもない道路網をつくつたのは、ほぼ同時代に遠いローマ世界での軍用道路が完成されていることと無縁でないかもしれない。東西のあいだに正規の交通はなかつたが、あるいはうわさがつたわつてかれの発想が成立したのかとも思える。その舗装はローマ道路ほどの重厚さをもっていないにしても、礫を敷きつめ、その一つづつを路面にたたきこむという入念な工事だつた。礫の一つ一つは、人夫が地面にしゃがみこんで小さな槌で一つづつ打ちこんでゆくというものであり、その労苦とこの道路網の長大さを思いあわせると、そこに動員された人夫の数がどれほどぼう大なものであつたかが想像される。

「ただ一人が、億兆の人間を所有している」

というかれの権力思想は、具体的には無数の人間をそれらの郷村から追い出して土工にしてしまうということでもあつた。そのほか、ごくささいな理由で多数の人民を虐殺してみせるということにおいても示された。たとえば、あるとき隕石が落ちた。その隕石に始皇帝にとって不吉な文字が書かれていたために、かれは犯人をしらべさせた。が、ついにわからず、このためかれはその隕石が落ちた付近の人間をことごとく殺してしまつた。

「殺せ」

と、勅命をくだすだけで、その役人たちは殺す。べつにかれにとって暴虐という意識はない。

「皇帝というのは、こういうことができる存在なのだ」

と、かれはおもつていた。

かつての斉王や燕王、楚王といったふるぼけた貴族権力とはまったくちがつている、ということ、かれは事実をもつて示さねばならず、言いかえればただ一人でもつて億兆の人間どもに對つていにはこういう権力の示威の仕方しかないと思はれてかかつていふやうでもあつた。

これらの虐殺は、かれの他の統一事業と、基本の思想として一つのものであつた。それまで文字が

地域によって異同があつたが、かれはそれらの多くを捨て、整理し、漢民族の使う文字を一種類にした。度量衡も地域によってまちまちであつたのを、一つのものにした。まことに皇帝は多忙であつた。

かつての秦王である政は、皇帝になつてから十年そこそこしか生きなかつた。このみじかいあいだに、かれはさまざまなことをしなければならなかつた。そのもつとも重要な事業の一つは、天下を巡幸して彼自身の顔を人民どもに見せてまわるといふことであつた。この点、かれは、歴史的経験をへた後世の皇帝たちよりも、皇帝として不馴れであつたといふことがいえるであらう。たとえば後世の皇帝なら帝都の宮殿を莊嚴にし、百官百姓を礼をもつて縛り、皇帝がいかに尊貴なものであるかを示すだけでよかつた。そのために礼教の学である儒教が作動した。しかし始皇帝は最初の皇帝であるために、自分を居ながらに莊嚴にしてくれる儒教の使いみちを知らず、逆に儒教を禁止し、儒書を焼きすてさせたほか、儒者四百六十余人を生きながらに坑に埋めた。

ともかくも、かれは皇帝がいかに偉大であるかを示すのに、自分自身で普天のもと、率土のはてまで巡幸して見せてまわらねばならなかつた。

この巡幸は、しばしばおこなわれた。巡幸することがかれにとつて最大の政治事業のようであつた。ついには巡幸の途上で病死してしまふほどに熱心だつた。巡幸には、華麗に武装した何十万という軍隊が、秦帝国の皇帝色である黒の旌旗を無数になびかせ、無数の金属製の兵器を陽にきらめかせ、この世のおそろしさとの世のおごそかさを最大限に演出してみせた。奥地はるか西方の隴西へ行つた。東のほうは黄河流域につらなる主要都市をへめぐつて山東半島の之罘山（現在の芝罘）まで行つてそこからはじめて海を見、あるいは琅邪台をゆき、内陸の彭城を通り、さらに、はるかに南下して揚子江のほとりに出て要衝をめぐるあるくといふものであつた。かれの政權そのものが動いてゆくために、扈從する文官の数もおびただしかつた。

かれ自身は、つねに車輛しやりように乗っていた。車輛は小さな宮殿のように裝飾がほどこされていたが、どういう技術者が設計したものか、多くの窓を自然に開閉することによって車室の中の温度の寒暑を調節せつじやうすることができた。この車は、特別な名でよばれた。

「輶輶車」

という。輶も輶も、この車のために文字がつくられたのではあるまいか。

巡幸の行列が都邑とふに入ると、群衆が両わきに殺到した。群衆は、後世のように礼教で飼いならされていないために皇帝を拝跪はいくわいしておがむということをせず、ただ物見高くむらがるだけであつた。こういう場合、始皇帝はかれらに顔を見せてやるために、わずかに輶輶車の窓をあけさせたりした。

「この地上で、はじめて大地を代表する皇帝というものがあらわれ出た。顔をありがたく拝んでおくがよい」

と、この男は、顔をみせてまわつた。

「あの男が、皇帝を称する政か」

と、無頼の者などは、対等の意識でかれの横顔を見た。かれは自分の顔を情熱的に見せてまわつたために、のちにかれの政權をたおして皇帝の地位につくべく起ちあがつた連中のたいていは、それぞれの郷土やそれぞれの作業現場においてかれの顔を識しつていた。かれこそいい面の皮であつた。その顔を識しられたとき、識しつたたれもが、「この男さえたおせばおれがこの男になれる」とおもつた。皇帝という存在が貴族制度や礼教思想でもって鑑かんわれていなかったために、そういうあんちよくな思いを野望家たちにもたせた。後世の皇帝制からみれば信じがたいほどの心理的事情であつたが、しかし「皇帝」の発明者である嬴政えいせい（始皇帝の姓と名）にとつて、後世のかれの同業者のように豊富な歴史的経験をもつことができない。創始者としてのうかつさはやむを得なかつた。

たとえばのちの反乱者たちのなかで、沛の劉邦の場合は、咸陽の都の街路でこの皇帝を目撃した。

このとき劉邦は始皇帝の土木事業の労役に従事していた。ある日、たまたま地上最大の権力が道路上をせずしずと移動してゆくを見、その壯觀に打たれた。感動したのではなかった。劉邦は大きく息を吐いてから、大丈夫、当二此ノ如クナルベキナリ——男はこうなきやだめだ——とつぶやいたのである。劉邦は皇帝に対して無用に戦鬪的な抵抗心はもたず、ただむやみにくびをふってうらやましがった。このあたりは、いかにも劉邦らしい。

一方、項羽は、華南の会稽で始皇帝の巡幸に出遭った。かれは群衆とともに見物した。華麗な輜輳車が近づくや、

「彼取ツテ代ルベキナリ」

と、大声で叫び、同行していた叔父の項梁を狼狽させた。かれのこのさげびは『史記』に出ている。由来、トツテカワルというのは、日本語にまでなった。項羽にとって本音であった。項羽の強烈な自負心からいえば、皇帝の車に乗って皇帝の衣服を着ている嬴政といういわ深い男になんの力も価値も感じなかった。始皇帝はたまたま秦の王家に生まれ、王になった。劉邦のような土民ではなく、項羽のような浪人同然の境涯でもない。秦は中国大陸の西北角にあり、半農半牧の非漢民族が雜居している。これらを統御するには法律と刑罰と鞭による統制主義による以外になく、秦は早くからその方式を採用し、法家の国とされた。秦は中原に熟成しつつあったような人文には乏しかったが、そのかわり、西方の遠い道からつたわってきている鉄や銅、あるいは真鍮の冶金が上手で、地をふかくうがった農具も、するどい兵器も他の六国（楚、齊、燕、韓、魏、趙）にくらべてはるかに豊富であった。

右のように、秦がもつ統制主義と生産力と兵器の優越が、この国をして他の六国を凌^{しの}がせ、秦王政にいたり、やがて六国をほろぼして、奇跡としか言いようのない大陸の統一を遂^とげさせた。政は運がよかったただけだ、という見方を、土工として江湖に流浪している六国の遺民たちに植^うえつけた。元来、旧六国の遺民たちは秦を野蠻^{やばん}国と見、漢民族の血液が薄いと見て輕侮^{けいぶ}していた。輕侮^{けいぶ}されてきた国の王が皇帝になったところで、劉邦や項羽ならずとも神聖視しなかつた。

始皇帝にも、そのことがわかつている。だからこそ人民どもの肝^{きん}をとりひしぐような巨大な建造物を各地で造営し、また行列をつらねて、皇帝としての自分の顔を見せてまわる必要があつた。しかし顔を見せてまわることは、かえって効果が逆になった。劉邦や項羽のような手合いの野望を刺激し、挑発してまわるという奇妙なはめになった。

巡幸には、始皇帝のべつな願望もその目的に組み入れられていた。

人間を宿命づけている老と死という自然の変化からまぬがれたいということだつた。万能の皇帝ならばそのことは可能だとかれは考えていた。かれは人文の稀薄^{きへつ}な西北の辺疆^{へんきやう}の人だけに瑣末^{さまつ}な文化意識にわづらわされることがなく、かえって合理主義的な思考法をとることができたし、おなじ理由で、一種の科学主義者でもあつた。この氣分のなかで、かれは方術を信じた。方術はこの当時にあつては科学というにひとしく、またその体得者である方士が、のちの科学を語るようにして神仙を語つた。始皇帝はかれらに不老不死の靈藥をさがすことを命じ、これがために万金を散じた。散じつづけた。「よい藥をつくれ」

と、方士たちをせきたてた。

かれらが調製するものをさかんに服用した。どうやら水銀のようなもので服^のんでいた形跡があつた。おそらく内臓がぼろぼろになるまでその影響が溜^たまりに溜^たまっていたにちがいない。

方士のなかでは、とくに盧生ろせいという者を信じていた。盧生は、「天上で神仙とつきあっている」という評判があった。

「盧生、にせ方士の多いなかで、そのほうだけを信じている。神仙をつれて来い」

と、かれはつねに言い、かつ一方で、盧生が怠なまけているのではないかと思い、叱しかりもした。

「神仙はかならず陛下のもとに参ります」

と、そのつど盧生はたのもしく返答した。

そのときこそ神仙が陛下に不死の薬を献ずるでありましょう、ともしばしば盧生は約束した。しかし一向に神仙が始皇帝の部屋に舞いこんでこなかった。盧生は窮きうしてしまい、それは陛下の生活のありかたがよくないからでございませう、とひらき直った。神仙は余人を嫌う。陛下の部屋に舞い降りようにもたえず家来どもがいて舞い降りられないのでございませう、という意味の理屈を整然たる理論と実証をもって述べた。合理主義者である始皇帝はもつともであると思つた。

以後、余人を身边に近づけなくなつた。咸陽かんようの宮殿には殿舎が二百七十棟たてもある。その宏大な宮廷のどこにかれがいるかも、余人に知らせないようにした。ただ宦官くわんかんの趙高ちやうかうだけは例外であつた。例外を設けておかねば皇帝としての仕事ができなかつた。趙高が府中から政治に関する書類を宮中のかれのもとに運んでくる。決裁を乞うためであつた。決裁が済むとそれらの書類を政府である府中まで運んだ。府中を主宰するのは丞相じやうしやうである。高名な李斯りしがその職にある。始皇帝が大陸を統一しえたのは李斯によるところが大きかつた。秦帝国が成立してから、この最大の功臣は、その息子たちがすべて始皇帝のむすめたちを嫁として貰い、李斯のむすめたちがすべて皇族に縁づくというほどの寵遇ちゆうぐをうけた。始皇帝の大土木事業、文字や度量衡の統一、あるいは辺境への外征事業も、すべてこの李斯によつて立案され、実施された。そのような老宰相でさえ、自分の君主が宮殿のどこにいるかを教えて

もらえなかった。それほど始皇帝の雲隠れ生活は徹底していた。そうすることがかけられない科学的態度であったといっている。

趙高だけが例外とされたのは、

「宦官は、人ではない」

という理由に拠るものであった。宦官はいうまでもなく男根を切りとられている。歴朝の宮廷が、宮廷の奥における王者のいかなる私生活の秘密も宦官という男たちの耳目に曝してきたというのは、かれらが人ではないという理由によった。秦の宮廷は史上最大のもののだけにむろん何千の宮女があり、その世話をする何百の宦官がいた。そのうち趙高が履歴もふるく、とびぬけて利口で機転がきくために、始皇帝はこれを寵用していた。

——趙高は、影のようだ。

と、宮廷のなかのひとびとから言われた。趙高はひそひそと歩く。とくべつな呼吸術でも心得ているのか、始皇帝の身辺で身のまわりのことをしていても、人間がそこにいるというわずらわしさを始皇帝に感じさせず、また床に敷きつめられた黒い磚の上を趙高が歩いていても足音もしなかった。氣配すら立てなかった。

皇帝は、毎夜、閨に女を必要とした。夜ごと、趙高が皇帝を女たちの部屋へ案内してゆく。皇帝は毎夜のように幸する女を変えた。趙高のしごととは、それにかかわるすべてだった。皇帝が幸する女がヒ首や毒薬などを持っていないかというのを裸にしてしらべ、また皇帝が女を幸している最中ににわかに弑するようないかにように監視した。このため皇帝が女の部屋にいる間じゅう、趙高もまたその部屋に影のように侍っていた。こういうこともあって、

（趙高は影であって、人ではない）